

## ケルト民族とその文学復興の精神

中 島 源 治

凡そ一国、乃至一民族の、国民性なり民族性の問題についてはわれわれは、その文学を通して考察するのである。これは、マシュー・アーノルド (Matthew Arnold) が、彼の「ケルト文学の研究」 (On the Study of Celtic Literature) の第一章の冒頭で言っていることを俟つまでもないことである。文学は、これを比喩的に言うならば、その国民の、乃至はその民族の情緒の花である。花はそれぞれの形状、色、匂い、及び艶を持つている。その形なり、色なり、匂いなり、艶は即ち国民性であり、民族性であると言えよう。さて、その国民性乃至民族性が形成されるそのよつて来たる要因を考えてみる時、われわれは、当然、その国民又は民族の生活条件としての環境という空間的要素と、その歴史乃至伝統の長さという時間的要素とを挙げなければならない。これら概括的な二要素が相からみ合つて、こゝに国民として或は民族としての性格が形成される。一粒の種子はその生命を内に秘めている限り、その内生命を目覚ます要素を含む地に落ちる時、その環境が好条件としてつゞく限りに於て、根を張り、生成して植物となる。莖を伸ばし、葉をつけ、花を飾り、或は実を結ぶであ

ろう。植物が生成伸展してゆくためには、先ずその源泉として、生きた種子が、例えばマッチが火を呼ぶように、その内包せる生命に感応する條件を備えた土壌に落ちることである。かくして種子が地に落ちるや、まことに神秘的な作用をもつて、生命力が外的に活動を始める。未来への足場をつくる。地中に生命が誕生するのである。誕生した生命は、好条件に恵まれて、力強く根を拡張して自己の世界を地下と地上に創世してゆくのである。勿論、その生成途上に幾多の栄枯盛衰はあるであらう。いずれにせよ、その生命創世に於ける生命力の豊かさ貧しさは、未来への重大なるキイであると言わねばならぬ。

而して、一国又は一民族に於て、その創世的なるものとしては、それぞれの神話伝説の世界である、と私は考えるのである。国民性乃至民族性としての花の性質は、そのよつて来たる淵源をその神話伝説の世界精神に持つている、と言うのである。まことに神話伝説は、その国又はその民族の、地下に生きた根の世界なのである。私がこゝで言う神話伝説の内容は、必ずしも今日なおさまざまな定義をもつ神話学や民族学によつて規制されるような

窮屈な限界を有しない。例えば、日本帝国主義がこれを悪用して破局を招来したが故に抹殺しようとしても、なお抹殺出来ない、日本民族の生活の奥に生きている緋文字的な神話の相を、私は考えているのである。又、松村武雄氏が『我が国がまさしく空前にして而して恐らく絶後である底の痛ましい悲境に陥つた原因の少くとも一つは、一般民衆が神話及び歴史が何であるかに就いて、従つてまた神話と国史との関係の眞相に就いて、眞正な心解を有しなかつたことである。我が国の古典神話が毫も歴史性を持たぬといふのは、言ふものの無知を暴露するに過ぎないか、若しくは敗戦後の危局に「時の花」をかざしにして、尖端人たるべく焦心する輕薄児の放埒言以外の何物でもない。』（神話と歴史）と悲憤するその「輕薄児」の血のなかにも尙潛在意識的にひそんでいるであろうところの、いわば、觀念論的に過ぎるかも知れないが、より本質的なものゝ相において考えているのである。この意味に於ける神話伝説は、それ故に、一民族としての生命の始源であるとともに、その未来を指向して流動する全生命である。過去に生きていると同時に現在に生き、又未来にも生きるであろう。民族の各ゼナレーションは、その過去の力を呼び、その力に駆られて未来を指向する。神話伝説は、民族の、だから、空想でなくて、血につながり呼吸しているのだ、と言える。それは民族自体の生きた反射像であると言わんよりはむしろ光源体であり、生活の延長である、と言わんよりはむしろ生活の本拠である、と言える。これは最早歴史のごとき外廓的なものではなくして、その民族生存の象徴であり、民族の生命そのものゝ相である。かくして民族が

その神話伝説を忘却又は喪失した時、或は他の圧力から破壊される時、それは民族としての変革か破滅を意味する。ギリシヤやローマの古典神話は、当代のそれぞれの民族の生命の光として、その民族の消長の彼方に、悲しいまでに生きて輝いていることをわれわれは見る。かように考える時、民族的悲劇は、自らの神話伝説の世界精神と絶縁されたときに發生する、と言うことが出来る。

ケルト民族の歴史は、まさしくかゝる悲劇の一つの歴史である。ヨーロッパ大陸に強大な勢力を誇つていたこの民族は、ローマ人の興隆と共に漸く衰え出した。最後の足場をブリテンに求めて海峡を渡つた彼等を待つたものは、やがてデーン人の来襲であり、更に十二世紀に入つて、ヘンリ二世の来攻に始まるアングロサクソン人の圧迫下にあえぐ運命であつたのである。アイルランドを母国として（一部スコットランド及びウェールズにも散在しているが）第一次世界大戦後の一九二二年に「アイルランド自由国」を創設するに至つたのであるが、特に十二世紀以降十九世紀中葉までの約七世紀に亘る長期間、彼等はその國語をすら奪われていたのである。アーノルドが言うように「巨大にして激情的、冒險的彷徨者」であり「初期世界のタイタン」であつた民族は、歴史の進むとともに萎靡しつゞけ、「世界は時代を追うて間断なくケルトの支配からその量を増して滑り落ちて行つた」のである。  
(For ages and ages the world has been constantly slipping  
ever more and more, out of the Celt's grasp.)

この民族衰亡の有様を、エルネスト・ルナン (Ernest Renan) が彼の「ケルト民族の詩歌」(Poetry of the Celtic Races) に於て述べている詩的表現を借りるならば、その歴史はそれ自ら長い一つのラメントである。然も今尙、その流浪のことを想い、自ら海を越えて来し逃亡のことを想う民族なのである。かゝる敗北の歴史は、この民族に政治性が欠けていたことに原因していることは、兩批評家共に、強く指摘しているところであつて、彼等の感情が本質的に動いてゆく方向は、「感受性」(sensitivity)という面である。この感受性こそは、この民族の短所でもあり又同時に長所でもあつたのである。即ち感受性の強さがその政治性を覆いかくしていたであろうが、しかし感受性から起る想像の豊かさ、彼等の神話伝説を、又文学を豊かにした原動力であつたのである。アーノルドは、ルナンがケルト民族の性質としてあげる「尊大で憶病」(fière et timide)であること、又、「感情の限りない優美性」(infinie délicatesse de sentiment)という点を否定して、「感傷的」(sentimental)という一語が最も適した評語であると言つているのは正しいであろう。そしてこの「感傷的」というのは、「常に事実の専制に対して反撥し易い」感情 (always ready to react against the despotism of fact) であつて、これがケルト民族をしてその精神的方面に於ても、実務的政治的方面に於ても「びっこ」(lame)にしたのだ、と評している。ルナンの批評よりも遙かにリアリスチックで一步を進めた感があるがケルト民族にとつての出発点は、この「事実の専制」の正体をつかむことであらう。更に又、ルナンがあまりにもロマンチックな

ケルト観に於て「時に朗らかに見えても涙はすぐその微笑のかげに光る」(If at times it seems to be cheerful, a tear is not slow to glisten behind its smile)と言つ、「その悦びの歌はエレジーに終る、その国民的メロディーの優美な悲しみに匹敵するものはない」(Its songs of joy end as elegies; there is nothing to equal the delicious sadness of its national melodies)とまで言つたケルト民族のこの限らない哀愁の裏に、根底づけられているものが何であるかを、われわれは知らねばならないであらう。そしてその禍根となれるものが、政治性とか実務性とかいうものゝ欠陥であることを發見して、こゝに今少し、彼等の被圧民族としての、自由を失つた歴史的事実を辿つてみる必要がある。

その主なる事実を拾つてゆくならば、まず一三六七年(エドワード三世時代)にアイルランド統治徹底のために、植民してきた英人にして親アイルランド人的証拠があれば、財産を沒收するとか惨虐な死刑に処するとかの重刑を課したキルケニー (Kilkenny) に於ける議決、一四九四年にはヘンリ七世がポイニンクス (Poynings) 総督を派してアイルランドの独立政府組織の可能的全権能を奪つた「ポイニンクス法案」を制定せしめたこと、かのエリザベス女王統治下においては、英国政治への反逆者数百人を、招待した饗宴の席に於て虐殺したこと、又宗教改革のためには敢て幾万というアイルランドの旧教徒虐殺をも辞せず圧制を加えたクロムウェル等、英国歴史上の偉大なる専制者等を彼等は忘れることは出来ないであらう。エリザベス朝以降十指にあまる対英抗爭

の愛国運動も、只徒らに犠牲者の数を増すだけで、一八〇一年には完全に英連邦の一属領となつてしまつた。然し一八四二年の十月、ダフイー(Sir Charles Gavan Duffy)・デイロン(J. B. Dillon)及びデヴィス(Thomas Davis)等に依つて「ネーション」紙(Nation)が創刊されるにおよんで、アイルランド国民精神の覚醒昂揚に重大なる役割を果たすことになつた。彼等は政治的論説において、又、詩においてケルト民族の愛国心を喚起して国家主義への強力なる推進力となつたのである。無教養のまゝ奴隸化された民族に、その過去に於ける祖先等の功業への目覚め、その伝統の誇りの復活を訴えた。デヴィスの「オーウェン・ロー・オニールへの哀悼歌」(Lament for the Death of Owen Roe O'Neill)「オニールは一六四一年の反乱の主謀者の一人」は彼の最も美しい詩でもつて、「ネーション精神」として有名になつた強烈な愛国心を宣揚したのである。

"Did they dare, did they dare, to slay Eoghan Ruadh O'Neill?"

"Yes, they slew with poison him they feared to meet with steel."

"May God wither up their hearts! May their blood cease to flow,

May they walk in living death, who poisoned Eoghan Ruadh."

「彼等はオーウェン・ロー・オニールを殺すことを敢つたのか。」

「然り、彼等は毒を以て彼を殺したのだ。剣をもつて彼と対するを恐れた。」

「彼等の心臓を、神よ、しばましめ給え、彼等の血の流動を止めしめ給え。」

オーウェン・ローを毒殺せし者をして、生きながらの屍たらしめ給え。」

かゝる激情を以て第一節が始まり、第八節まで切々たる哀悼の熱情が漲つてゐるのである。次に最後の三節を引用しよう。

"Wail, wail him through the Island! Weep, weep for our pride!  
Would that on the battlefield our gallant chief had died!

Weep the Victor of Bein Burb—weep him, young and old:

Weep for him ye women—your beautiful lies cold!

"We thought you would not die—we were sure you would not go,

And leave us in our utmost need to Cromwell's cruel blow—

Sheep without a shepherd, when the snow shuts out the sky—

O! why did you leave us, Eoghan? Why did you die?

"Soft as woman's was your voice, O'Neill! bright was your eye,

O! why did you leave us, Eoghan? Why did you die?  
Your troubles are all over, you're at rest with God on high,

But we're slaves, and we're orphans, Eoghan!—why did you die?"

「島こそつて彼のために泣け、吾等の誇りであつた彼のために！」

吾等の凜々しい長は願くは戦場で果てゝくれたらよかつたものを！

ベイン・バーブの勝者のために泣け、彼のために泣け、老いも若きも、

汝等女達よ、彼のために泣け、汝が美しき人は今や冷たく横わる！

「吾等は予想しなかつたのだ、汝が死するを——吾等は信じていたのだ、吾が一大事、

クロムウエルの惨忍なる筈に汝が吾等をまかせないことを、羊飼の居ない羊のように、空一面に雪とざすとき——

おゝ！ 何故に汝は吾等をおきざりにしたのか、何故に死んだぞ、オーウェン！」

「汝の声は女のごとくやさしかつた、オニールよ、汝が眼もまた輝かしかつた、

おゝ！ 何故に汝は吾等をおき去りにしたぞ、オーウェン！ 何故に死んだぞ？

汝が苦しきは終えて今や神と共に高き所に休む、されど吾等は奴隷である、孤児である、何故に死んだぞ、オー

ウェン？」

私の訳は大意を伝えるに過ぎないが、まことに素朴純眞、胸を打

つものがある。

然し「アイルランド文芸復興」(Ireland's Literary Renaissance)の著者アーネスト・ボイド(Ernest Boyd)に依れば、

「ネーション紙」を中心とした詩人達は、強烈な愛国の至情を吐露しながらも尙、ケルト的伝統精神に依つていたと言わんよりはむしろ英国的のそれであり、文学的価値と言わんよりも政治的価値に重点があつて、近代アイルランド詩歌の発展には大した役割を示さなかつた。しかしかゝる国民精神の喚起昂揚の狼火をあげながらも、十九世紀中葉のアイルランドには更に苦悩の運命が続いたのである。即ち、一八四五年度における收穫不良と、特に農民が主食とする馬鈴薯の不作に始まつて、一八四六年・七年と相続いた大飢饉は、アイルランド人をしてまことに悲惨な窮乏に迫込むことになつた。従来の「穀物條令」(The Corn Laws)廃止をめぐつて英国政府内に政党間の軋轢があり、一八四六年ロバート・ピール(Sir Robert Peel)が職を犠牲にして同法廃止に成功はしたものの、救援物資すら十分でなかつたのである。幾万という人々はアメリカに移住して行つた。この飢饉の終りの人口調査によると、それ以前のより二百万余も減少したと言われている。飢饉以後も地主と小作人との関係悪化のために、アメリカに移住する者は増大するのみで、そこに反英感情も悪化せざるを得なかつたのである。パドレイク・コラム(Paddy Column)は、彼がアメリカで編輯出版(一九二二年)した「アイルランド詩歌集」(Anthology of Irish Verse)の序文の中で次のように表白している。アイルランドの田舎道を通る時は必ず音楽と歌を聴いたも

のであるが、飢饉後の田舎はすっかり沈黙に覆われてしまった。これは一齊の伝統の中絶を意味するものである、と嘆き、更に「歌はその調べと共に消えた。この国民伝統の保有者たりし老人組は先ず第一にこの飢饉の墓地に埋つたのであつた。」(The song perished with the tune. The older generation who were the custodians of the national tradition were the first to go down the famine graves.) 殆ど「民族の死」を意味した程の大きな痛撃を受けた後のアイルランドの歴史は、彼が言うように、尙「恢復と悪化の記録」(a record of recovery and relapse)であつた。即ち、グレイヴスの後「ネーション紙」に拠つたジョン・ミッチェル(John Mitchel)やスミス・オブライエン(Smith O'Brien)等による独立計画が進められたのであるが、忽ち暴露して覆滅され、又アメリカにおける「フィニアナ会」(Fenian Brotherhood)の独立運動等、その何れも徒らに血の犠牲を繰返すだけであつた。しかしこれ等度重なる革命によつて、ヴィクトリア朝末期に於てはグラッドストーン(Gladstone)の対アイルランド政策の緩和を克ちえたのであつて、他方に於て、アイルランド文芸復興と呼ばれる輝かしい運動を派生する生命力となつたことは、「ネーション紙」一派の地の塩ともなれる愛国詩人等の当然受くべき名譽であらう。「ネーション紙」によつた詩人の中でこの素朴單純な政治的愛国詩から一段とケルト的民族性にたち入つた詩人にジェームス・マンガン(James Clarence Mangan)(1803—1849)がある。マンガンは彼の愛国的情熱をアイルランド的文化の源流たるゲール(The Gael)の過去に注ぎ、その希

望や嘆きや思い出の詩歌を訳して切ない憧憬を述べた。「キンコラ」(Kincora)、「ティロンとティルコンネル王子等への哀悼歌」(A Lament for the Princes of Tyrone and Tyrconnell)、「バンバへの哀悼歌」(Lament for Banba)等が主たるものであるが、その多くは彼自らの詩と同様、暗い哀愁に充ちたもので、ケルト民族のための号泣とも思えるものである。

Ah where, Kincora! is Brian the Great?

And where is the beauty that once was thine?

Oh, where are the princes and nobles that sate

At the feasts in thy halls, and drank the red wine,

Where, O Kincora?

あゝ、キンコラの地よ、ブライアン大王はいまいずこぞや、

かつて汝がものたりし美はいずこぞや、

おゝ、かつて汝が広間の宴席に坐して朱色の酒をのみし

王子や貴族らはいまいずこぞや、

おゝ、キンコラの地よ、いずこぞや、

と言う節で始まり、全部で十一節から成つている。その最後の節は、

I am MacLiag, and my home is on the Lake;

Thither often, to that palace whose beauty is fled,

Came Brian to ask me, and I went for his sake.

Oh, my grief! that I should live, and Brian be dead

Dead O Kincora!

われはマックリアグなり、吾が家のはかの湖畔に在り

しばしば、その美すでになきかの宮殿に

ブライアンはわれを訪ね、われまた彼のために行きぬ、

おゝ、わが悲しみよ！ われひとり生きてブライアン亡し

ブライアン亡し、おゝ、キンコラの地よ！

〔註―ブライアンは一〇〇〇年より一〇一四年までアイルランドの大王でクロンターフの戦に勝利を得た後で、ノルウェー人のある浮浪人に殺された。キンコラは彼の居城の地であつた。〕

「バンバへの哀悼歌」は各節八行、六節から成り、十八世紀のエガン・オラヒリー (Egan O' Rahilly) という詩人の作だと伝えられている。その第一節を紹介する。

O My land! O my love!

What a woe, and how deep,

Is thy death to my long mourning soul!

God alone, God above,

Can awake thee from sleep,

Can release thee from bondage and dole!

Alas, alas, and alas!

For the once proud people of Banba!

おゝわが国土！ わが愛の地！

なんと言ふ深き悲しみぞや汝が死

わがながき哀愁の胸には！

たゞ神ひとり、天上の神のみぞ

汝を眠りより覺まし得ん

汝を束縛と哀愁より解放し得ん！

悼ましや、悼ましや！

かつて誇りしバンバの民のために！

〔註―バンバは多数あるアイルランド呼び名の一つであつた。〕

マンガンが現代のアングロ・アイリッシュ語を用いて書いたかゝる暗い、沈痛な色調を帯びたゲールのなるものへの回想は、その歴史の扉を閉ざされて、知恵の実を知らぬ自由を失つたものゝ情緒を解放する世界への仄かな燈火となつて、多くの追隨者を呼ぶことになつたのである。彼等の先祖達が呼吸していた神話伝説の世界へ通ずる途を、探求せんとする学者的文人が相次いで現われた。ゲリック学者のサミュエル・ファーマーガソン (Samuel Ferguson) 歴史家のスタンディッシュ・オーグレディ (Standish O' Grady) 古代語の翻訳家としてのジョージ・シガソン (George Sigerson) 自ら「ゲリック・リーグ」 (Gaelic League) を一八九三年に創設して、その指導者としてゲリック語及びゲリック文学の復活に一生を捧げたダグラス・ハイド (Douglas Hyde) 等がある。殊にオーグレイディはアイルランド文芸復興の父と呼ばれている程で、若い世代の作家達に、單なる政治面より抜け出た、誇りとしての国民性の意識を喚起し、国民思想、国民文学の淵源に回想せしめた。一八七八年より八〇年にかけて出版された彼の「アイルランドの歴史」 (History of Ireland) 二巻にたゞよう敍、事詩的精神は、神話英雄時代のアイルランドの資料を活現し、ゲール人のすばらしい伝来の文化財を確保し、アイルランド古代の吟誦詩人物語を再現し流布せしめて、アイルランド文芸復興期に

おける作家等に非常な寄与をしたのであつた。この意味において彼は、正にアイルランド文学発展のための開拓者であつたのである。彼の祖国愛への感懷を示した「われわが情を汝に捧ぐ」(I give my heart to thee)と、この詩の中で歌っている。

I gave my heart to thee, O mother-land,  
I, if none else, recall the sacred womb.  
I, if none else, behold the loving eyes,  
Bent ever on thy myriad progeny,  
Who care not nor regard thee as they go,  
O tender, sorrowing, weeping, hoping land.  
I give my heart to thee, O mother-land.

われは捧ぐわが情を汝に、おゝ母なる国土  
誰ひとり他にあらずとも、われは憶う、その聖なる子宮を  
誰ひとり他にあらずとも、われは見る、あまたなる子孫に  
注ぎけんその愛しき眼を  
しかも彼等は、汝を敬い思うことなく行き過ぎぬ  
おゝ、悲しみつ、慟きつ、且つ希望もつやざしき国土  
われは捧ぐわが情を汝に、おゝ母なる国土

この詩の三節目の最後では

#### What unseen

Glory reflected makes thy face a fame?  
Leave me not; where thou goest, let me go.  
I give my heart to thee, ideal land!

如何なる姿なき栄光の映り反りて

汝が顔を焰と燃えしめるぞ?

われをひとり残す勿れ、汝が行く所に行かしめよ  
われは捧ぐわが情を汝に、おゝ理想の国土!

と、祖国への清純なる愛著を述べている。

このような精神文化運動は、かくして組織的形体を備えて、祖国復興のために力強く推進される機運に到来したのである。一八八三年には「サザック・アイルランド文学倶楽部」(Southwark Irish Literary Club)がロンドンに設立され、「汎ケルト協会」(Pan-Celtic Society)が一八八八年にダブリンに創設された。それが各発展的解消して一八九二年に「アイルランド文学協会」(Irish Literary Society)がロンドンに、「アイルランド国民文学協会」(Irish National Literary Society)がダブリンに組織され、翌一八九三年にはすでに紹介したダグラス・ハイドを主宰者とする「ゲリック協会」の設立を見た。かくして十九世紀末はケルト民族にとつて、その精神復興の曙であつた。

アイルランド文芸復興運動の指導者イエーツ(W. B. Yeats)は「文学に於けるケルト的要素」(The Celtic element in Literature)と言う論文——これはルナン及びアーノルド等のケルト民族に就いての批評に対する当事者側の声明書とも言つてよい——に於て、

「若し文学が絶えず古代の情熱と信仰とに溢れていなければ、單なる些事の記録、又は情熱なき幻想、情熱なき瞑想に墮落するであらう。而してスラヴ、フィンランド、スカンディナヴィヤ及び



ケルト等の歐洲古代の情熱と信仰との泉の中で、ケルトの泉のみは數世紀に亘つて歐洲文學の主流をはなれてはいない。ケルトの泉はしばしば歐洲の芸術に過剰な生氣潑刺たる精神をもたらし「た。」と確信し、更に、シェイクスピアはその妖精界の諸々をケルトの伝説に負うていること、スコットはハイランドの伝説に魅力を感じたこと、スカンディナヴィアの伝説はイブセンを、又ワグナーの想像を活気づけたこと等を例示して、古代の伝説がかくして近代世界の芸術上の最も情熱的要素となつたことを述べ、今やケルト民族の文學の再誕生のために新しい伝説の泉、しかも「今新しい伝説の泉が、歐洲中の何れの泉よりも豊富なる泉が、即ちゲールの伝説の大いなる泉」(a more abundant fountain than any in Europe, the great fountain of Gaelic legends) が開かれつゝあることを信じ、最後に「ケルトの運動は主としてこの泉を開くことである。而してそれが来るべき時代に如何程主要なものであるかを誰一人推測しえまい。何故ならば、凡ゆる伝説の泉は世界の想像のための新しい陶醉の場であるから」(The Celtic movement is principally the opening of this fountain, and none can measure of how great importance it may be to coming times, for every new fountain of legends is a new intoxication for the imagination of the world.) と言つてゐる。この詩的想像を基底とするイエーツ一派の新文學運動は、「ネーション紙」や「フイーアナ協會」派の革命運動による英國離脱の途を進むよりも、先ず民族性の淵源に溯つてケルト古代の精神を喚起し、幾世紀に亘る苦難に堪え來たつた民族を先ず、その情

緒的本質に覺醒せしめて、自然に英國的伝統より解放せんとする方途をもつて展開されたのであつて、これは明らかにケルト民族独自の神話伝説の世界への復歸運動であり、その精神のフェニックス的復活運動であると言えるのである。

扱てアイルランドには、統治者たる英本国との關係上、新しく擡頭した國民文學運動に、その國民文學の本質的解釈として二様の見解があつた。文芸復興期の詩人にして劇作家たるバドレイク・コラム(Padraic Colum)によれば、一つは言うまでもなくダグラス・ハイドらによつて推進されたところの民族古來のゲリック語によるゲリック文學の樹立であり、他の一つは、十八世紀に於てゴールドスミスやセリダンに始まる英語、即ちアングロ・アイリッシュによる文學である。尤もゴールドスミスやセリダンはその文學暦からして英文學の本流に入ることとを正當とする「アイルランド文芸復興」の著者アーネスト・ボイドの觀點は支持せらるべきである。セリダンとは異つて、ゴールドスミスはカレッヂの教育もダブリンで受けているし、尙、彼の生涯の前半期に於ける放浪癖の如きケルト的性格は如実に現われているけれども。いずれにせよ十九世紀八十年代に興つた文學運動は、アングロ・アイリッシュによるゲリック文學精神の再建運動なのである。

これ等の運動を綜合的に観るならば、「ネーション紙」を中心とする一派の運動は、政治的、又は社会的意味に於ける民族解放運動であり、イエーツ等の文芸運動はより本質的な意味に於て、情緒的文學的にケルト精神解放復活のための開拓運動と言えるので

ある。この所謂アイルランド文芸復興は、イエーツが強調するよう、又、ボイドが定義づけるように、あくまでケルト民族精神の源泉、即ち、彼等の祖先がその血とし肉として呼吸した神話伝説の世界の再発見、再創造を意味するものであつて、オスカー・ワイルドやバーナード・ショウのごとき、アイルランド出身と雖も英国化せる点、換言すれば、その民族の神話伝説の世界精神を忘失し、その世界精神から脱落した、という点において、この文芸復興とは何等關係を有しないものである。

而してこの文芸復興の性格として重要な問題となることは、既に述べたように、その用語による二様の立場が存在したことである。言語は国民性の記号であり、象徴であるからその国語たるゲール語で書かれない文学は、眞の国民文学とは言えない、と言う急進分子も出て来て、ゲール語でない外国語の英語で書かれる文学は、結局対英国的ジェスチュアのものであつて、アイルランド国民自体のためではないとして、むしろ反感を表明した程であつた。「ゲールック協会」のリーダーたるハイド博士のごときは文学作品はゲールックで書き、歴史とか文学上の主張とかは英語で書くといった使い分けすらしているのである。がしかし、ボイドに言わしむれば、ゲールック語でなくとも、その民族精神を伝える文学にはアングロ・アイリッシュ語は適當であるとして、彼が文芸復興期の文学を取扱う上の限界を判然とさせている。

国粹派とも見るべきトマス・マクドナハ(Thomas MacDonagh)の如きは、このアングロ・アイリッシュ語による文学者等の作品中に、少からぬゲールック語の誤訳のあることを例証指摘して、

その著「アイルランド文学」(Literature in Ireland)に於て、「入念な文法的組織を持ち且つ意味の変化を示す微妙な発音上の変化を持つ言葉が、恰も何の組織もなく、無茶な発音にも何ら困らされることなきかの様に取扱われている」(A language with an elaborate grammatical system, with delicate phonetic changes to indicate changes of sense, is treated as if it had no system and as if it could suffer nothing from barbarous mispronunciation.)と言ひ、国語がしかも同じ国内に於てかゝる取扱をうける運命にあることはまことに情ない、と慨いている。彼はイエーツすらこの誤りを犯していることを指摘して、彼イエーツはゲール語になると誰かの気まぐれな綴りを採用して、そのまゝまるで英語であるかのように発音する。しかしさすがにイエーツはこの点に關しては正直で、自己の様式を固執することなく、固有名詞の古代発音を學ぶとその引用の詩を改訂したものであると言つて、例えば、イエーツの有名な「蘆間の風」(The Wind among the Reeds)の詩の中ではゲール語の 'colleens' を英語の 'womens' に代えて英語化した点も多いことを指摘している。彼はアイルランド文学が、アイルランドの国語としてのゲール語を知らない批評家や、いゝ加減な翻譯家によつて誤り伝えられ、それがそのまゝ流布されていることに対して繰返えし不満を述べている。

然し、漸く軌道に乗つた新しい文化運動は大局的に見て、目的は同じ民族独立の獲得にあるにせよ、その手段方法に於て結局政治派と文学派の分裂を來たさざるを得なくなり、政治性を帯びた

文人等はイエーツを囲む一派と袂を分つに至つた。八十年代以降  
今世紀に入つて、大体ジョン・エム・シンク (John M. Synge)  
の死 (一九〇九年) 後第一次世界大戦勃発頃迄のケルト文学復興  
期は、先ず詩によつて発足したのであるが、イエーツを筆頭にジ  
ョージ・ラッセル (George W. Russell) —— 筆名 A・E —— の  
外、シエーマス・オーサリヴァン (Seumas O'Sullivan)、パド  
レイク・コラム (Padraic Colum)、ゼームス・ステイヴンス  
(James Stephens)、ジョセフ・キャンベル (Joseph Campbell)  
ゼームス・カズンス (James H. Cousins)、トマス・マクドナハ  
(Thomas MacDonagh) 等をあげることが出来、劇に於てはイ  
エーツの外シンク、レディー・グレゴリー (Lady Gregory)、ダ  
ンセイニー (Lord Dunsany)、それにパドレイク・コラム等が主  
たるもので、詩及び劇方面はまことに盛んであつたのに比べて、  
小説及び批評面は殆どこの間に見るべきものなく、小説にジョー  
ジ・ムア (George Moore) をあげうる程度である。しかしムア  
も彼の小説のモデル問題でイエーツやエー・イーと別れざるを得  
なくなつた。ボイドが言うように、アイルランドの如き小国では  
公平な批評という問題はとりわけ微妙な仕事であつて、殊に国家  
非常時の状態に於ける人間の感情というものは、自ら刺戟され易  
いが故に、同僚間に平和的關係をつゞけんがためには相当な考慮  
を配らなくてはならず、賞讃すべき程のものでない場合は沈黙し  
ておくにしかず、という結果になるのである。かくの如き個人関  
係において批評が発達するはずはないのである。この意味におい  
て、ゲイリック学者であり、詩人であり、且つ一九一六年四月の

暴動のリーダーの一人として処刑された革命家でもあつた若きマ  
グドナハの如きは、感受性に強いケルト的精神に生きた批評家で  
あつた、と言えよう。非常時つゞきのアイルランドに於て、端的  
に相手の感情に訴える詩歌演劇の潑刺たる勃興を見たのに反し  
て、散文方面の劣勢であつた事情は十分理解出来ることである。

第一次世界大戦勃発と共に、アイルランド文芸復興の焰も衰え  
て再び革命の非常時に突入したのであるが、この所謂文学復興の  
各分野を綜合して概観する時、われわれは対内的と対外的の両面  
から考察する必要がある。即ち対内的には、余りにも高価な生み  
の悩みではあつたけれども、兎に角一民族の魂の復活として、民  
族古来の伝統への覚醒としての本来の目的を達成した、と言ひ得  
ること、対外的には、特に英文学本流との關係に於ては、歴史的  
に見てはむしろケルトの文学媒材が流用されていた過去を清算し  
て、こゝに確固とした国民文学を樹立せしめた、という事實は見  
逃せないであろう。然して更にこれを世界文学史的観点に立つて  
みると、他の文学の影響を受け容れたその代償として、更に他  
に影響を与え得る程のものとはなり得なかつた——シンク一派の  
劇のごときは日本の劇作家にはある程度の影響を与えた、と言え  
るかも知れないが——とは言え、詩人としてイエーツ、エー・イ  
ーを、劇作家としてシンク、グレゴリー、ダンセイニー等の名を  
列記すると、彼等が世界文学の中に占める位置は必ずしも低くは  
ないであろう。

何れにせよ、悲劇の民族が、数世紀に亘る苦悶の闇を抜け出で  
、到達し、樹立した文学の記念塔であつたのである。グレゴリ

「がゲールック語から散文訳して一九一九年に出版した「キルタータン詩歌集」(The Kiltartan Poetry Book)の序文で、彼女が集めた詩歌の中に哀悼の歌が歡喜の歌よりも遙かに多くなつたことは自分ながら不思議である、と言つてゐるのも痛ましい限りであるが、又それが当然な程に彼等民族の過去の思い出は、空しく民族復興のための犠牲者となつた幾多の革命家のための哀悼に充ちていて、ルナンが、「彼等は勝利を歌うよりもより以上に敗北に泣く。その歴史はそれ自体一つの長い哀悼歌である」(They

weep more defeats than they sing Victories. Its history is itself only one long lament.)と説く通りであるが、この憂鬱の裏面として、バドレイク・コラムが「アイルランドの詩歌は献納歌——国土に対する民族の献納歌を以て始まる。」(Irish poetry begins with a dedication of the race to the lands)と、彼の「アイルランド詩歌集」の序文に於ていう言葉をも十分にわれわれは理解出来ることである。